

## G. ジンメル「他者理解論」考

池田光義

## 序

(1)  
 他者理解をめぐるジンメルの省察は、彼自身の思想的展開や、彼が生き抜いた時代の社会・思想状況の推移、あるいはまた彼の死後、今日に至るまで様々な分野において交わされてきた、いわゆる《他者問題》、《他者認識》、《対人知覚》等々にかかわる議論の経緯を顧みるとき、きわめて重要な意味もっている、と私は考える。あえてこのような切りだし方をするのも、従来のジンメル研究・受容において、彼の他者理解論が十分な検討の対象とされてこなかったという実情を念頭においてのことである。もちろん、彼の他者理解論がまったく蚊帳の外に放置されてきたわけではない。研究史的・受容史的回顧は割愛するが、理解社会学、小集団論、対人関係・知覚論といった社会学の各分野、歴史哲学、眼差し論といった哲学の各分野においては、この点に関するジンメルの先駆的業績に言及する論考が、多数にのぼるとはいえないまでも、存在しないわけではない。問題は、ジンメルの他者理解論の全貌を彼の思想全体のなかで把握しようとする志向がきわめて稀薄である、という点である。

その要因はいくつか挙げることができるが、ジンメル自身、この問題に様々な著作の様々な脈絡のなかで論及しているのも、そのひとつであると思われる。(2)  
 したがって、この問題にたいするジンメルの考え方の全体像に多少なりとも近づくためには、まず、彼自身の様々な叙述を一度、整理・再構成してみる作業が必要であろう。そこで、本稿では、多種多様な著作のなかに鑿められたこうした言説を点綴するときに浮かびあがってくる他者理解論の輪郭を素描してみたい。

そのさいにわれわれが重視したいのは、ジンメルの論述における、他者理解の重層的構造の視点である。もっとも、ジンメルにあっては、他者理解は様々

な準拋粹組に応じて様々な重層性を示すものと考えられている。したがって、この視点を重視するという場合、たとえば、同一の個人についての知覚・理解像を、実践的認識、美的評価、倫理的判断、愛といった営みのなかでそれぞれ異質な視角から独自に構成された諸対象の重層体として捉える考え方に、注目することもできよう。しかしながら、本稿では、他者理解というものを、《関係》の位相と《交わり》の位相——この2つの概念の意味は行論のなかでおいおい明らかにしていく——との重層として把握するジンメル<sup>(3)</sup>の視角に、議論の焦点を絞ってみたい。というのも、この視角こそ、ジンメルが何故かくも他者理解の問題に執着をみせたのかを、彼の思想全体とのかかわりで解き明かす鍵を提供してくれるものと、考えるからである。

## I

ある事象を考察するさい、様々な角度から様々な概念装置と表現様式を駆使してその諸相を次々と描出・解析していくのがジンメルの手法の特徴のひとつをなしているが、《関係》位相における他者理解に関する彼の記述も、こうした複眼的思考に貫かれている、といえる。そこで、まず最初に、『社会学』（1908年）第1章の付説「社会はいかにして可能か」における《第1の社会的アプリオリ》についての論述（S,24f.）を祖上に載せ、《関係》位相における他者理解論の概要を把握するための糸口としたい。ジンメルは、諸個人が直接的対面状況で得る他者像とは、他者の個性性の直接的模写像ではなく、感覚的（経験的）に与えられた他者の断片的・部分的素材をアプリオリな一般的カテゴリー（形式）に基づいて統一的形象へと補完・変形・統合することによって成立する類型像にほかならない、と主張し、人間類型、自己完成、社会的一般性という3つのカテゴリーを挙げている。当面、われわれが問題としたいのは、最後のカテゴリーである。

このカテゴリーに基づく他者認識に関し、ある社会圏（たとえば将校団）に帰属する諸個人は、お互いを、純粹に経験的に、また純然たる個体として認知しあうのではなく、——同一社会圏の内部では——自己と同一の社会圏の成員（将校）、あるいは——異なる社会圏のあいだでは——他の社会圏に帰属する者（民間人）として認知しあう、とジンメルは述べている（S,25）。つまり、ここでいわれている、社会的カテゴリーによる他者認識とは、特定の社会圏

(集団)への帰属性によって他者の統一的形象を構成することなのである。こうした考え方は、カント認識論の超越論的思考方法を社会関係論に転用したものにはかならない。ジンメルの了解によれば、カントの超越論的問題設定の射程は、自然科学的認識の領野に限定されたものであるが(“自然認識はいかにして可能か”), ジンメルはその対象範囲を社会化過程(Vergesellschaftungsprozess)にまで拡張し, “社会はいかにして可能か”と問いをたてるのである。ジンメルのこのような問題設定の背景には, 社会の本質規定を諸個人の織りなす心的相互作用に求め, 諸個人の相互知覚・認識が社会関係全体の性格と構造によって規定されつつも, こうした社会関係そのものの本質的な構成契機であるとする基本的思想があることを指摘しておくのは, きわめて重要である。ジンメルにとって, 他者認識の過程は, 社会関係の形成・再形成過程でもあるのだ。つまり, ここでは, 社会関係論としての他者認識論が展開されているのである。このことを確認したうえで, 社会的一般性のカテゴリーに基づく他者認識という考え方の要諦を, われわれの問題脈絡において必要となる範囲でまとめておきたい。

(1) まず第1に, この考え方においては, 他者認識における, 一般のカテゴリーによる対象構成の視点が前景におしだされていることが重要である。諸個人が相互に認識しあうということは, 相互に他者という対象として構成しあうことなのである。(2) そのさい, 社会的に規定された, 無自覚的(非措定的)に作用する一般のカテゴリー(形式)にしたがうこうした対象構成は, 感覚的に与えられた断片的素材の統一という機能だけではなく, 個体的なものの一般化・類型化, さらに断片的素材への社会的形式の付与という機能を担っている, という点に留意する必要がある。この働きにより, 他者によって構成された私という対象, 私によって構成された他者という対象は, 私と他者とが相互に「社会化するのに必要とされる質と形式」(S,25)を獲得するのである。(3) ところで, ここでは, 社会的一般性のカテゴリーは集団帰属のカテゴリーにはかならないわけであるから, このカテゴリーによる相互的な他者認識とは, 自己および他者の集団帰属の相互的認知作用でもあることになる。ここですでに注意を喚起しておきたいのは, こうした他者認識=帰属認知の考え方が, 社会圏の分化・複数化, およびこれを連動する個人の集団帰属の分化・複数化という, ジンメル社会学の基本的構図に深く根ざしていることである。この連関に

着目するとき、同時に、あるいはあい前後して様々な社会圏に帰属するある個人は、これまた同時に、あるいはあい前後して様々な社会圏に帰属する他の個人と相互に認知しあう、という視点が浮かびあがってくる。そうすると、この個人についての像も、ジンメルの場合、一義的に確定されえるものではなく、集団帰属の様々な組み合わせにしたがって多様で重層的な相貌を呈しざるをえない、ということになる。

以上、他者構成としての他者認識の考え方を概括してきたが、次に、圏域の相互境界化としての他者認識という考え方について検討してみたい。

ジンメルによれば、各人の周囲には、物理的身体を越えて同心円状に広がる観念的圏域 (ideelle Sphäre) が存在する<sup>(4)</sup>という。というよりも、ジンメルにとって、個人とは、身体とこの身体に封入された精神に尽きるものではなく、身体をもその一要素とするこうした観念的圏域として存在するのである。そして、この圏域は、それ自体としては漠然とした広がりをもつにすぎず、個人と個人との相互境界化 (gegenseitiges Begrenzen) を通じてはじめて一定の範囲と輪郭を示す、とされる。そのさいジンメルが強調するのは、この相互境界化によってはじめて各人は自己の自己性と他者の他者性を知る、という点である。というのも、この相互境界化によって、一方では、「自立した内的完結性、諸要素の相互依存、中心にたいする生動的関係」(S,467)が、他方では、他者の圏域の固有性・不可侵性が意識される——さらには、他者圏域の境界線は自己圏域の境界線と重なり合うから、他者圏域の不可侵性にたいする意識は、自己の内的統一にたいする意識を増幅させる——と、ジンメルは考えるからである。

ここで留意すべき点は、こうした個人相々の観念的境界形成と、個人内部における観念的自己分割——それも、一般化・類型化された外層と個性性を保持する内層とへの分割——との相即性・相補性をジンメルが重視していることである。そうであるがゆえに、他者の内面にたいする遠慮・配慮・慎重さ (Diskretion) ということが個人間の相互認識の場面における重要な役割を演じているという事実、ジンメルは多大な関心を示すのである。われわれは、お互いに、「他者と世界に向けられた層で重要なこと」、つまり意図的に他者にたいして開示されたか、あるいは誰の目にも周知の一般化・類型化された外層にのみ関知することが許容されるのであって、「他者の《即自》」=「内層で重要なこと」(S,265)を知ろうとすることは禁忌なのだ、とジンメルはいう。他

者の圏域に踏み込むことのできるはその外層のみであって、それを越えて他者の内面を知ろうとすることは、他者の「精神的所有物」の毀損であり、「人格的価値」(ibid.)の蹂躪なのである。そしてさらに、こうした他者の内面への配慮と相関するかたちで、他者による認識に晒されていることを意識したうえで自己開示あるいは自己隠蔽がおこなわれることに、ジンメルは注目している。それも、小児や“未開人”にみられるような、全身を不可視化することによる自己韜晦ではなく、むしろ個人の言行・表情を様式化したうえで積極的に他者の目に晒し、これを自己の外被<sup>(5)</sup>=仮面として活用するような近代的自己開示=自己隠蔽がジンメルの関心の焦点をなしていることに、われわれは注意しておきたい。というのも、他者の視線を意識した自己開示と自己隠蔽との相互性によって成立するこうした現象にジンメルが注視することの背後には、諸個人の相互境界化と連動して、個人の圏域内部においても一般化・類型化された外層とそうではない内層とへの分化が進行する、ということへの洞察が働いていると思われるからである。

ところで、相互的な他者認識の場面において、各圏域がその内部で外層と内層とに二重化するという事態は、ジンメルにとって、同時に、個人内部における対他存在(Für-Andere-Sein)と対自存在(Für-sich-Sein)とへの重層化でもある、と解釈することができる。そして、ここでも、外層の一般化・類型化、内層の非一般化・非類型化という視点が重要な意味をもっていると思われる——個人は、外層を一般化・類型化することにより、不特定多数の誰もが共有し、理解しうる形式、つまり社会的に妥当する価値をもつ“衣裳”を身にまとうことになるのだ(ここでいう“衣裳”とは、文字どおりの衣服・装飾の類のみならず、行為・発話・身振りの様式、いや顔の表情や体臭といったものまでを含む)。「より一般的なもの、様式化されたもの、いわば抽象的圏域」は、「個人の社会的意味圏域」(S,279)でもあるのだ。この様式化された衣裳を着飾った社会的存在の形式が他者による自己の認知を可能にし、この認知はまた他者による個人の価値の承認でもある(承認論としての他者認識論)。

以上、《関係》位相における他者理解論の一端を略説してきたが、それでは、《交わり》位相における他者理解論とはいかなるものであり、《関係》位相におけるそれとどのような連関があるのだろうか——。しかし、この問いへの解答に迫るまえに、ジンメルの思想的軌跡におけるひとつの重大な転換について

多少なりとも論じておかなければならない。

## II

ジンメルが他者認識（理解）の問題に関心を抱いたのはかなり初期の段階からで、その嚆矢はすでに Schubert-Solden: “Grundlage zu einer Ethik” への書評（1887年）<sup>(6)</sup>にみることができる。しかし、この問題の哲学的基礎づけに関する彼の見解が本格的に展開されるのは、1892年に上梓された『歴史哲学の諸問題』においてである。この著作は、カントの超越論的手法を歴史哲学に転用することを試みたものであるが、そのなかで、他者認識（＝歴史認識）<sup>(7)</sup>において直接的な主客一致を自明視する素朴な自然主義、レアリズムが批判の標的にされ、超越論的構成主義の立場から、他者認識における主観の側からの積極的な変型・補完・総合、つまり構成作用の契機が強調されている。そのさい、この構成主義がいわゆる「類推に基づく自己移入（投影）の理論」と連繫していることが特徴的であり、これは、ジンメルの思想的展開の中期段階にまで尾を引いている、と考えられる。ところが、こうした所見は、晩年の一連の著作——『レンブラント』（1916年）、『歴史的理解の本質』（1918年）、「肖像画の問題」（同年）——において、みずから手で根本的に吟味・修正されることになるのである。

それでは、ジンメルは、かつてみずからも信奉していた自己移入論の瑕疵をどの点にみているのだろうか。第1に、自己移入論は、二重の対応関係、すなわち自己の内面と自己の外表面、自己の外表面と他者の外表面との対応関係を前提にして、自己の内面を他者の内面に移入・投影する論理構成になっているが、ジンメルは、自己移入論の前提たる二重の対応関係を知覚・認識することは現実生活ではきわめて稀有な事態に属するとし、その不可能性を説くのである。自己移入論の第2の難点は、自己が過去に直接経験したことのないような内面的過程も他者のなかでは理解しうる、という歴然たる事実にかかわる。この問題は、実は、かつてジンメル自身も頭を悩ませた懸案であり、『歴史哲学の諸問題』の第2版では、その暫定的解決策として、「潜在的な遺伝（伝承）」、「類的記憶」（G,67）なるものが仮説的に想定されるが、ジンメル自身もこれで問題が氷解したと考えていなかったことは、この論述箇所にもみられる、ジンメルらしからぬ生彩を欠いた筆致からも明白である。こうした過程をへてジンメルが

得た結論こそ、自己移入論の枠組に固執するかぎり、この問題は原理的に解決しえない、というものだったのである。

ところで、『歴史哲学の諸問題』の眼目が主客一致を唱える自然主義にたいする批判にあったことはすでに示唆したとおりであるが、実は、自己移入論も「主体と客体との本質的同一性」(G,61)を前提にしていることを、ジンメルはのちに見際めるに至るのである。そして、主体と客体の内的差異は、それがある限度を越えると明晰な理解の障碍になるという消極的要因ではあっても、主客同一性が他者認識の成立そのものを積極的に基礎づけるものではない、と主張することになるのである。ここで大切なことは、こうした洞察が、主客同一論に必然的に付きまとう問題性、すなわち他者認識における創造的契機の間隙にたいする批判へとジンメルを導いている点である。理解というものを、「唯一、主体と客体との同一性で基礎づけるか、あるいはこうした同一性に還元する」理論は、理解されたものを、「理解者にすでに存在しているものの機械的な反復」(H,83)としてしか把握できない、とジンメルは喝破する。さらに、この段階において展開される、主客一致の原理を他者認識論の根底に据えることへの批判は、自己移入論と結託した構成主義に巢喰う独我論への批判と重なりあっていることを、確認しておきたい。というのも、ここでいわれる主客同一性とは、自己と他者とのそれぞれの根源的独自性・非還元性と相互前提の関係にある根源的な主客同一性ではなく、他者の内面への自己の内面の移入・投影、あるいは、自己の内面を根拠にした他者の構成によってははじめて成立する事後的な同一性にすぎないからである。自己(主体)と他者(客体)の根源的独自性と根源的同一性との相補性は、いうまでもなく、他者認識を一般的な対象認識から峻別する分水嶺をなすものであり、かつまた独我論の立場からは透視しえない契機であるが、ここで、ジンメルがこうした見地に到達するまでの道程を明らかにしておくことは、事柄の重大性からいってあながち意味のないことではなからう。

まず、『歴史哲学の諸問題』第2版をみておくと、自己移入論＝構成主義を基軸として展開されるジンメルの自然主義批判は、対象の直接的模写を基本原理とする考え方を撃とうとするあまり、他者の固有性・独自性の放逐という高価な代償を払わされていることが目につく。きわめて粗雑ないい方をすれば、感覚的に与えられた諸断片(素材)に認識主体の統一性(形式)を付与して統

一的形象を構成することのうちに認識行為の内実をみるのが構成主義の立場であるが、この立場を認識客体が同時に人間主体である場合にも貫徹しようとするとき、他者の主体性契機を抹殺することになるのは必然の至儀である。もっとも、ジンメル自身、すでにこのことに気づいていた徴候がある。たとえば、他者認識の場合、その断片的素材は、自然認識の場合に較べ、対象主体の統一性の刻印を比較的鮮明に帯びており、断片間の内的連関もより強力である、という指摘がみられるが (G,68ff.)、それは、こうした問題性のある程度まで意識したうえでの言説であろう。ただ、この言説は、両者の量的・相対的な差異を主張しているにすぎず、両者の質的・絶対的な差異を認めているわけではないことも、十分に確認しておく必要がある。さらに、他者認識においては、私の意識のなかで私の意識によって追思考・追体験された心的過程が、私のそれとしてではなく他者のそれとして表象されること (心的過程の構成と、この過程が他者の過程であるという意識との同時性)、しかも、この心的過程の表象には独特な《感情》が伴う、ということにジンメルが着目している (G,31ff.) のも、われわれの関心を惹くところである。この独特な感情とは、問題となる心的過程が、私も含めた個別的認識主体の意識における実現とは独立しながらも——その意味では一般的・超個人的ではあるが——、しかし特定の唯一的他者存在にのみ妥当する統一的連関である、という感情である。この連関性は、一般性 vs 個性の対立の彼岸にあるがゆえに概念的な一般化・定式化が不可能であり、独特の感情の随伴という事態でしか与えられない、とされるのであるが、このことがまた、心的過程というものはその意味内容の合理的・論理的連関ではなく、まさに生動的であるがゆえに非合理的・非論理的な過程生起そのものである、という主張とも絡んでいることが重要である (ここでいう非合理性・非論理性とは、合理性・論理性を準拠点として前提したうえでのその不在・欠落・否定という意味での負性ではなく、合理性・論理性の準拠枠への彼岸性あるいは無関係性という意味での負性であることはいうまでもない)。心的過程の構成と、この過程が他者の心的過程であるという意識との同時性を強調することは、まず自己内部で心的過程を構成し、次にこれを他者の内面に移入するという、自己移入論が落ち入りやすい陥穽 = Erst-dann 図式を排斥することにつながるし、他者認識に纏綿する独得な感情への関心は、合理性と非合理性、一般性と個性との緊張関係、あるいは他者の根源的独自性といった、

他者認識をめぐる固有の問題の核心へと肉迫する回路を暗示して興味深い。あるいは、より一般的には、ジンメルのこうした関心は、自己移入論＝構成主義の枠内ではあるが、この枠内では把握できない、あるいは少なくとも十分に処理することのできない、他者認識に固有の諸問題がジンメルの意識野のなかに入りつつあったことを、意味している。

『社会学』の第1章では、他者の現実性の絶対性を認めつつも、それが自己の現実性の絶対性を移入することにより保証されるかのごとき、自己移入論的思考の残滓とも受け取れる叙述がみられるものの (etwa S,23), 基本的には、自己移入論と訣別したかたちで構成主義的思考が展開されていることに、注目されてよい。これは、個人間の心的相互作用における相互構成の契機が重視されていることに負うところが大きい、と思われる。そしてまた、この契機の重視により、自己と他者の根源的独自性と根源的同一性とを、自然認識から他者認識を弁別する中軸的視点(「社会化のもっとも深遠な心理学的・認識論的図式と問題」S,23)として確認する成果が生みだされたことも、十分に評価されるべきである。ただし、ここにおける記述は、あくまでも主客二項図式を基調とする認識論の位相で立ち顕われてくる、自己と他者の根源的独自性と根源的同一性の様相を捉えたにすぎないこともまた、注意しておく必要がある。認識論的位相から存在論的位相への枠組転換がおこなわれるのは、後期においてである。

「汝とは、恐らくそれ以上還元不能で直接的にしか体験することのできない根源的カテゴリーである」(R,26)。

「私はむしろ……汝とは、私と同様に根源的現象なのだ、と思う」(H,66)。

存在論的枠組の設定によってこそ、ジンメルは、自己移入論を完全に払拭し、構成主義をもって他者認識の哲学的基礎づけとする思考と袂を分かち、自己と他者の根源的独自性と根源的同一性(＝共同性)を、したがってまた他者の他者性(汝＝「それ自体私であるところの非・私」R,26)も、確定することになるのである。別のいい方をすれば、他者認識の基盤は、他者認識それ自体の内部にあるのではなく、自己と他者、私と汝との根源的な《交わり》位相にある、とジンメルは考えるに至るのである。そして、この根源的位相においてこそ、私とともに他者が、他者とともに私が与えられているのであり、両者が成立し、また両者が成立させる場こそ、相互理解という働きの連関である、とも。

「汝と理解とはまさに同一のものであり、いわば一方は実体として、他方は機能として表現されているのだ」(H,68)。

ところで、自己移入論や構成主義を撃つことと、その根元に蟻局を巻く心身二元論を射ることが表裏一体の作業であることは、他者問題の歴史的展開を一瞥しただけで明白である。ジンメルの場合はどうか。

『歴史哲学の諸問題』初版において、ジンメルは、他者の全体像はその個別的・断片的な表出・外観からしか獲得できないが、後者はしかし前者を前提としてのみ理解しうる、という悪循環を指摘し、これは両者のあいだの一連の相互作用によって漸近的に解決される、と主張している(G,20FN)。ところが、第2版以降では、このことによっても「原理的な困難」は解消されないと修正され、前者は「諸人格の統一的な性格全体という感覚」に、後者は「個別的表出からの帰納の結果」にそれぞれ配置されることにより、二元論はむしろ累乗されてさえいる(G,21f.)。ようやく後期に至り、ジンメルは、この循環思考の前提に、感覚に直接与えられる身体と、感覚的には知覚不能で自己の内面の移入によって間接的にしか得ることのできない精神とに他者を引き裂いて考える心身二元論が隠棲していることを洞見し、これに筆鋒鋭く批判を加えることになるのである(R,16ff.u.38ff.;H,63ff.;P,99ff.)。ところで、相互に分離された身体と精神との合成体として他者を捉えることは、感覚的なものと知性的なものとの合成体として他者を捉えることと表裏一体である。そして、その場合、認識主体の方も知覚主体と思考主体とに分解されて考えられているし、さらには、感覚的なものは思考行為のたんなる素材あるいは手段の地位に賤められている。そうであるならば、ジンメルにおいても、心身二元論批判が同時に感覚-知性二元論批判の責をも果たすことになったのは、自然の成りゆきであろう。あるいは、より一般的にみて、この批判が機械論的・合理主義的他者認識議論およびその基盤たる機械論的・合理主義的人間観への批判につながっていったことも、納得のいくところといえる。

### III

第1節の問いに立ち返ろう。

まず、《関係》位相において他者を捉える理論(以下、便宜上、他者認識論と略す)と《交わり》位相において他者を捉える理論(直覚知論<sup>(8)</sup>)を、ジンメ

ルがどのように弁別しているのか、簡単に整理しておきたい。

他者の捉えられ方についていえば、他者認識論においては、他者は、あらかじめ分解された、相互に独立し無関係な諸要素、それも多くは一般化・類型化・概念化が可能な諸要素の総合体として構成されるものと考えられている。これにたいし、直覚知論の場合、他者は、生ける全体＝総体的存在 (Totalexistenz) = 全き個体そのものとして直覚されるものと了解されている。次に、こうした他者の捉えられ方の相違と照応して、他者を捉える側の在り様や他者への彼のかかわり方についても、異ったかたちで理解されていることが指摘されねばならない。たとえば、他者認識論は、他者を捉える側にも分解・総合の構図を想定するが(思考から分離され、その手段と化した感覚と、感覚から独立した本来の機能としての思考との総合という図式もそのひとつである)、直覚知論では、他者を捉える側も全き統一体として考えられている。直覚知は総体感覚 (Totalsinn) が働く総体知覚 (Totalwahrnehmung) である、ともジンメルは述べているが (R,84; H,17; P,99), その場合、この総体知覚とは、個々の感覚の集計でもなければ、理性的思考に対置された感覚でもなく、個々の機能態にあるにすぎない総体存在 (Totalexistenz) そのものを意味していることに、注意しておきたい。

「孤立した道具という解剖学的な個別的意味での目が知覚するのではなく、われわれの統一的存在、人間全体が他の人間全体を知覚するのであり、個々の感覚は、われわれの本質存在の知覚力全体が流れる水路にすぎないのである。知覚する者自身が総体的存在であり、総体的存在はそのいずれの特殊なはたらきのなかにも完全に生きているように、この知覚する者にとって、知覚される者もまたはじめから統一体としての精神化された身体なのであり、あとの複雑な総合によってはじめて成立する統一体などではないのである」(P,99)。

さらに、こうして自己も他者も分解—総合の構図によって解読しようとする他者認識論は、他者理解というものを、認識主体としての自己が認識客体としての他者に関係し、他者を構成 (= 認識) する営為として考えるのにたいし、直覚知論は、これを、総体的存在と総体的存在とが交わる営為、生と生とがふれあう営為として捉えている点を確認しておきたい。前者では、主客二項関係に基づく他者《認識》が、後者では、生の波動の交差に成立する他者《体験》

が問題なのである。体験 (erleben) とは、生が生として生きる (leben) ことのうちにあるのである。ここで注意すべきなのは、他者認識が他者を一般化・類型化することとそれが主客二項関係のうえに成立することが相即しているのと対応し、他者体験が他者の総体性把握＝個体性把握であることとそこでは主客二項関係が消滅していることが相即している点である。次の一節は、古典ローマン的肖像画とゲルマン的肖像画を対比したものではあるが、この連関を端的に指摘している。

「それ〔イタリアの肖像画〕が人物のある類型、あるいはまた多数の一般的性格の集計として捉えることによって、人物は鑑賞者に、あるいは鑑賞者は人物に向き合<sub>レ</sub>わ<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>れるの<sub>レ</sub>にたいし、人物の総体の把握ははるかに同化・一体化をうちに含むのであり、これにより鑑賞の瞬間に主体－客体という態度は直覚の未分化状態のなかに消えていくのである」(R,85, 傍点はジンメル自身による強調)。

以上、他者認識論と直覚知論とを簡単に比較対照してみたが、それでは、ジンメルは、後期段階で直覚知論の境位に達したのち、他者認識論の有効性を全面的に否定したのかということ、そうではない。他者認識論は、ジンメルにとって、《関係》位相において現実に遂行されている他者理解を<sub>レ</sub>一面的に<sub>レ</sub>絶対化<sub>レ</sub>している<sub>レ</sub>限りで拒否されるべき理論なのである。そこで、《関係》位相における他者理解と《交わり》位相における他者理解との関連をジンメルがどのように捉えていたのかが、次に問われなければならない。

この問題を考える素材として、中期段階後半の論考ではあるが、『社会学』第1章の付説「社会はいかにして可能か」をふたたび取り上げてみたい。ここで問題となるのは、様々な社会関係に対応する、個人内部における社会内存在と社会外存在との様々な“比率”についてジンメルが論じている箇所 (S,26) である。この比率は、経済活動を典型とするような、個人の全存在が社会内存在と化している様態と、愛や友情にみられるように、個人の全存在が社会外存在となっている様態の両極のあいだで漸次変動する、という。社会内存在と社会外存在との関連についてはいくつかの複雑な問題が伏在しているが、いまこの点を括弧に入れて考えてみると、まず、個人の存在が社会内存在によって被覆されている状態とは、諸個人が客観的・一般的機能の担い手として相互に社会関係を形成している状態であり、本稿第1節で検討した論理が貫かれている

位相、つまり《関係》位相における状態と解釈できよう。次に、この論述箇所を、晩年にもなされた一連の著作で展開されている愛に関する言説に接続してみると何がいえるのか、考えてみたい。

純然たる愛においては、私たちは、ひとそのものをそのものとして、つまり統一的＝個体的存在として愛するのであり、ひとが個々の一般的性質——あるいはそうした性質の集合——を所有しているがゆえにその人間を愛するのではない、とジンメルはいう。そして、愛する側も、ひとを愛する限り、肉欲的存在、理性的存在、利己的存在、他利的存在などといった相互に孤立した存在——あるいはそうした存在の集合——として存在するのではない。愛とは、したがって、「相対的に未分化な、生の全体のはたらき」<sup>(9)</sup>なのであり、生の脈動そのものなのだ、という。愛の契を結ぶ者同士のあいだには、両者の生には疎遠で外的な一般的第3者によって媒介され、距離と接近、分離と結合が交互・交差する主体—客体、主体—主体関係、いやそもそも《関係》なるものは存在しない、という。お互いは、お互いの生にあって、なおかつ生と生として交わり、ひとつの《流れ》と化すのだ、という。ジンメルにとって、愛は《交わり》位相が赤裸々に露出した状態であること、このことにもはや多言を要すまい。そして、そうであるならば、経済活動と愛の両極のあいだに配置された、社会内存在と社会外存在の様々な交差という考え方に模して、純然たる《関係》位相に成立する他者認識と純然たる《交わり》位相に成立する直覚知の両極と、この両極のあいだに配置された、2つの理解様式の様々な交差という考え方の可能性をジンメル晩年の思想に想定しても、あながち牽強付会とはいへまい。いいかえれば、他者理解の多くの場合は様々な《配合率》で2つの理解様式が混合して成立しているものと、ジンメルが考えていた可能性は大いにあるといえる。しかし、2つの理解様式についてジンメルがどのように考えていたのか、もう少し直截に確定してみたい。

まず第1に確認されなければならないのは、四分五裂、自己破碎と不連続化を重ねる個別的・経験的生にあっては、精神と身体が「相互に偶然的であり、ときとして疎遠で対立し、確たる関係に欠ける」(P,108)という心身分裂が実在するのであり、心身二元論的思考も虚空に浮かぶ戯論などではなく、個別的・経験的生の世界に跳梁する実践思考そのものに根を下ろしている、とジンメルが考えている点である。このことは、心身二元論的思考様式に限らず、他

者認識論的思考様式の全般に関するジンメル<sup>(9)</sup>の了解についても、認めることができよう。しかしまた、ジンメル<sup>(9)</sup>の次のような考え方も十分に確認しておく必要がある。精神化された身体、心身統一体としての他者こそ、他者を理解するうえで「根本動機」、「まず最初に、そしてまた最終的にも決定的なもの」として、他者認識の営為たる「部分的知覚や細分化、分解や再構成」(P,99)の基底をなしている、というのがそれである。これは、われわれの用語を用いて、次のように一般化することができよう。すなわち、ジンメルにとって、《交わり》位相で成立する直覚知こそ、《関係》位相に成立する他者認識の根底<sup>(10)</sup>あってこれを支えているものなのである。

#### IV

ジンメルが他者認識論的思考の一面性を批判し、直覚知論的思想を提示しながら、他者理解を他者認識と直覚知との両面で捉えようと試みるに至る事情は、本稿の冒頭でも示唆しておいたように、19世紀末・世紀転換期の思想状況の推移やジンメル自身の思想全体の変遷と深く連動している。ジンメルは晩年、それぞれの時代精神によって醸成されると同時にこれを領導する「根本概念」<sup>(10)</sup>の存在について論及し、17・18世紀＝自然・自我概念、19世紀＝社会概念の図式を提示したうえで、20世紀には生の概念が支配的になるだろうとの展望を述べている。これは、たんにジンメル<sup>(9)</sup>の思想的な時代診断であるばかりでなく、みずからの思想遍歴にたいする自己評価・反省をも含意していることを、まず確認しておく必要がある。ところで、世紀転換期は、新カント派的思想の成熟・熟爛期であると同時に、形而上学的思想が蘇生をみる時期——さらには、これに対応して、新カント派内部でも認識論の存在論的問い直し<sup>(11)</sup>が企図される時期——でもあった。そして、この時期にはまた、ジンメル自身の了解によっても、絶対的なもの・実体的なものへの確信が瓦解し、すべてを相対比し無数の関係・過程へと解消する相対主義・関係主義の弥漫繁茂をみたのであった。ジンメル自身はどうかといえば、当初、超越論的思考と関係主義的思考の転用によるあらたな社会概念・社会学の構築に腐心していたことは、よく知られているところである。「私は認識論研究・カント学研究から出発したが、これに歴史研究・社会学的研究が連動していた」<sup>(11)</sup>の文をもって始まる未完の「自己描写」そのものが、この経緯を簡潔に証言している。このことにより、ジンメル自身、関係

主義、「極端な社会学主義」(G<sup>+</sup>,114)の跡梁跋扈に深く加担する結果となったことは、銘記されてよい。われわれの問題脈絡でとりわけ関心を惹くのは、こうした関係主義・社会学主義によって彫琢されたジンメルの個性性概念の帰趣である。

個人を「類の歴史的発展の産物、社会的糸のたんなる交点」とみなし、歴史過程や社会連関に濫觴をもつ「諸属性と諸力の集計」に還元し尽くす「斬新な歴史的・社会的見方」<sup>(12)</sup>に共鳴するジンメルは、『社会分化論』(1890年)において、《社会圏の拡大・分化》の図式を導入して、諸個人において交差する社会圏の様々な組み合わせに個性性の根拠を求めようと試みている。ところが、ジンメル自身、こうした一方的な社会学の個性性把握にたいして次第に懐疑的、やがては批判的色彩を強めていくのである。そして、この傾向は、関係主義・社会学主義の一面性・狭隘性にたいする不信、個人存在の解体・崩壊への危惧の累積過程に即応していた、といえるであろう。こうした経緯を念頭に置きながら、次に、《関係》位相における他者理解の問題性と、そこで暗黙裡に前提されている個性性把握との連関についてジンメルがどのように考えていたのかを、その思想史的発展における中期と後期に分けて検討してみたい。

自己と他者とのあいだにおける相互認識に対応する、外層一内層、対他存在と対自存在への個人の分化・二重化にたいするジンメルの考え方については、すでに第1節で略述したとおりである。ここでなによりも問題にしたいのは、ジンメルが、こうした機序こそ個としての自我の成立・拡大の場とみなす一方、そこにいくつもの深刻な背理を予感している点である。たとえば、ジンメルにとって、秘密に象徴される内面世界の形成は、「開示された世界に並ぶ第2の世界の形成」(S,272)を意味しているが、この内面世界には、他者によって不断に侵犯される可能性が付きまとい離れないのである。内面世界を意図的に暴こうとする他者の目がたえず光っているだけではない。他者認識の相互性と、他者認識が他者についての認識であると同時に他者への反応であるという機構そのものに、他者が意図的に読み取ろうとする、あるいは自己が意識的に自己開示をおこなう以上のものを、他者が意図せずして把握してしまう可能性と必然性が潜んでいるからである(S,267f.u.468)。「視線の背理性」の叙述は、これを描写して秀逸である。

「他者を知覚するその眼差しで自己自身を曝けだしてしまうのである。つま

り、この場合、主体が客体を認識しようとする行為そのものによって、自己を客体に晒してしまうのである。与えることなくして受け取ることは、目を通じてはできない相談なのである」(S,484f.)。

「人間は、他者がこの人間を見つめたからといってすでに他者にとって現前しているわけではなく、この人間も他者を見つめてはじめて完全に存在するのである」(S,485)。

しかも、ジンメルにとって、眼差しは、そのときどきの内面の在り様を漏洩するばかりではなく、内面的生そのものの直接的流露でもあるのだ。それでいて、近代化の進捗とともに、対人場面では他の感覚に較べて視覚がはるかに大きな比重を占めることになるのである (S,486)。ジンメルが、自己開示と自己隠蔽、他者認識と他者の内面への配慮との関係が近代的な対人関係にとってもつ重要な意義を強調しながらも、その微妙さ、不確かさを繰り返して止まない理由の一端もここにある。

ジンメルの考える個としての自我は、「第2の世界」の保持によってだけではなく、これと相互前提にあると同時に緊張関係にもある、「対他的に存在することによる自我の高揚と、自己を強調し拡張することによる対他存在の高揚」(S,281)によってはじめて成立する。しかし、ジンメルにとって、自己—他者関係が同時に個人の対自存在と対他存在、目的としての自己（あるいは他者）と手段としての自己（あるいは他者）との「戦場」(S,279)であることを考えるならば、この側面における自我の存在根拠もまた背理性を免れえないことは、明らかであろう。なによりも問題なのは、自己の対他存在化は、外層の一般化・類型化、それも様々な自己—他者関係に応じた様々な一般化・類型化によって成立するということである。こうした考え方が、とりわけ近代社会において社会関係が拡大・分化・客観化し、個人の帰属・関与する集団も巨大化・複数化・機能化するなかで、諸個人は様々な機能のたんなる担い手に転化していく、という近代人の在り様にたいするジンメルの認識と深く結びついていることは、いうまでもない。そうした近代人は、様々な視線が交差するなかで、社会的妥当性を帯びた様々な外層を次々と形成・再形成していかなければその自我が希薄化し零点に収縮していく危険性と、ときとして互いに反撥・排斥さえしあう様々な外層を形成するなかで、自我が無限に分裂・拡散していくという危険性とを、たえず同時に乗り越えていかなければならない存在なのである。

ジンメルにとって、自己と他者との《関係》における相互認識・認知の地平が個としての自我の成立場面であるにせよ、逆にこの成立場面そのものが個としての自我を危ういものにしていくのである。<sup>(13)</sup>

後期の段階に至り、自己と他者の相互的な分解・再構成を内実とする《関係》位相における相互理解と、様々な社会関係の交点として個人を捉える社会学的個人把握とのあいだに本質的な連関が存在することを、ジンメルは明晰に認識するようになった、といえる。この点で、晩年の秀作『レンブラント』で展開されている、細密化＝個性的描写という絵画思想にたいする批判（R,63ff.）が興味深い。このなかで、ジンメルは、人物を細密に描写すればするほどその個性に迫ることになる、という論理を180度逆転させ、細密描写ほど人物の個性から乖離していくのだ、と主張する。というのも、ジンメルによれば、細密化とは、向心的で統一的な全体から分離・独立し、他の個体との通分・比較や、個体の内的連関とは異なる自立した連関への組み込み、さらには概念化あるいは様式化が可能な諸規定・諸要素へと個体を分解していくことにほかならないからである。細密化は人物の個性からの疎隔化である、という思考は、個別化・差異化こそ個性化・特殊化の内実をなすという俗論を峻拒し、個別化はむしろ個体的なものを抽象的一般性に還元することにほかならない、と考えることによってはじめて成立するのである。ジンメルにとっては、輪郭も不明瞭な漠たる全体的——あるいはその意味で一般的——印象こそ、個性性把握を可能にするものなのだ。そして、これが生と生との《交わり》位相において成立することは、これまでの行論から明らかであろう。もうひとつ留意しておかなければならないのは、細密化＝個性性把握の論理は、個人というものを個別的諸要素の集計として捉え、個別的諸要素の異なった組み合わせにその個性の本質を求める機械論的個性性概念に依拠している、とジンメルが考えている点である。そして、この機械論的個性性概念が社会学的個性性把握と密通していることは、ジンメルにとって明白な了解事項なのである。

ところで、細密描写—印象描写に関するジンメルの関心は、個人内部についてだけではなく、個人とその周囲・他の個人とのあいだにたいしても向けられている。この連関で興味深いのが、《雰囲気》（Stimmung）についての叙述（R,55ff.u.128ff.）<sup>(14)</sup>である。ジンメルは、とりわけレンブラント晩期の群像作品に漂う独特な雰囲気に注目し、その内実を「純然たる人格的圏域の相互作用

用」(R,157)に求めている。ジンメルにとって重要なことは、諸個人は、そのなかであって、たとえばルネッサンス期に盛行をきわめた、諸個人から自立した一般的・抽象的構図としての「社会学的統一形式」(R,156)といったものに組み込まれるかたちでひとつのまとまりを形成しているのではなく、あくまでも各自の個性を喪失することなく相互に溶解しあっている、という点である。

「……自己の統一を失うことなく自己を越えでること、自己を越えて輝くこと、いわば最初の可視性を越えた圏域を周囲に漂わせること、これが生の本質だからであり、生の統一は、他者の圏域と相互に作用し、浸透し、融解しあうあいだも、自己の中心点と結びついているからである」(R,57)。

《関係》態における他者理解の場合、当事者たちは、自己と他者を相互に一般化・類型化、分解・再構成し、また相互に境界を設定しようとする。したがって、そこで形成される当事者たちの共通圏域は、各自の内部連関から絶縁され、各自の個体的色彩とは疎遠であり、抽象的一般の性格を帯びている。そこには、特有の雰囲気醸成が醸しだされる余地はない。こうした雰囲気は、生と生とが交わるなかで、「各個人から進しりである生動性の直接的交織」(R,55)が成就してはじめて醸成されるものなのである。だから、それはまた「そのつどごと一回的なもの」(R,128)なのである。だからまた、そこには一般的なもの、典型的なものは介在しないし、圏域の内的・外的分割、相互境界化も存在しないのである。レンブラント晩期の群像作品で描きだされた個々の人物の細部もシルエットも明解な線と確たる色階に欠き、微妙に流れ溶けあっていくことにジンメルが関心を寄せるのにも、理由のないことではないのである。

ジンメルにとって、個人内部における諸要素の差異化・自立化と、個人相互における個人の差異化・自立化は、同一事項の2つの側面にすぎない。こうした考え方は、個人の帰属する社会圏の複数化・重層化、個人における様々な社会圏の交差に個体化の根拠を求める思考が辿り着く当然の帰結である。しかも、この思考は、近代社会の現実の思想的投影であり、その支配的思考傾向なのである。しかしながら、個人内部の諸要素の差異化・自立化は個人全体の統一性と同一性を崩しかねないし、個人間における差異化・自立化の極限にあるものも互いにもあまりにも距離をもちすぎてしまった孤独な人間存在の集合である。いずれにせよ、ジンメルにとって、個人を個人として成立させる根拠が、同時

にまた個人を崩壊させる根拠を形成していることになる。ジンメルがレンブラント晩期の作品に立ち昇る独特の雰囲気執拗なこだわりをみせ、その機構を明らかにしようとするこの背景には、こうした問題性にたいする強烈な意識が働いていることは、明白であろう。

### 小 括

生と生とが全き存在として交わりあう位相に成立する他者理解の考え方は、個人と個人とが分裂的・部分的存在として関係しあう位相に定位された他者理解の考え方にたいする反定立として提示されたものである。しかし、後者の考え方も現実に根拠をもつものであり、ジンメルにとって、他者理解とは、結局のところ、両位相における2つの様式の他者理解が形成する緊張関係にその内実をもつ、といえるのである。あるいは、より正確に言えば、《交わり》位相における他者理解が基盤となって《関係》位相における他者理解も成立・展開するのだが、しかし、後者は前者から自立、いやときとして前者に対立させざるに至る——が、それでいて前者は、一度その純性を破瓜されるやいなや、後者の成就なくしては成立しえない性である、とジンメルは考えていたと思われる。

一般的にあって、人間存在を生として捉えようとするジンメルの考え方には、近代人が背負い込んだ背理性からの救済という意味が仮託されていることは、いうまでもない。しかし、生の概念には、過程と内容、内容と形式との齟齬・葛藤の契機がはじめから組み込まれていることもまた、よく知られているところである。ジンメルが救済理念として生の概念を追求すればするほど、生の悲劇性を浮き彫りにしてしまう所以である。他者理解についてのジンメルの思索も同様の軌跡を示す結果となったことは、本稿で多少なりとも明らかにすることができたと考える。ただ、この軌跡が、他者理解をめぐるジンメル以降に展開される討究過程の趨勢と問題性をかなりの程度まで暗示していたことについては、示唆の域を越えて論議することはできなかつた。稿をあらためて論じてみたい。

#### 引用文献略記表

G=*Die Probleme der Geschichtsphilosophie. Eine erkenntnistheoretische Studie*, Leipzig 1892<sup>1</sup>, 1905<sup>2</sup>, 1907<sup>3</sup>.

S=*Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaft-*

ting, Leipzig 1908<sup>1</sup>, 1968<sup>5</sup> (Berlin).

G<sup>+</sup> = Goethe, Leipzig 1903.

R = Rembrandt. *Ein kulturphilosophischer Versuch*, Leipzig 1916.

P = Das Problem des Porträts (1918), in: *Zur Philosophie der Kunst*, Potsdam 1922.

H = Vom Wesen des historischen Verstehens (1918), in: *Brücke und Tür*, Stuttgart 1957.

## 註

- (1) 本稿では、“他者理解”という用語を、「他者認識」、「他者知覚」、「対人知覚」あるいは狭義の「他者理解」などの包括概念として用いる。
- (2) もっとも、これが本質的要因ではない。ジンメル思想の全体像にたいするわれわれ自身の理解が引き裂かれているのが、その最大の問題なのである。形式社会学の祖としてのジンメル、新カント派傍流としてのジンメル、生の哲学者としてのジンメル……。ジンメルの思想全体がその内的連関において統一的に把握されたことはついぞなく、過去のジンメル研究がわれわれに提供してくれるのは、相互に内的連関を欠いた様々な問題脈絡から彼の思想・理論にたいして加えられた外的で断片的な論評の集積にすぎない、と裁断しても、異を唱える論者はおそらくそう多くはあるまい。また、彼の業績の少なからぬ部分が多種多様な雑誌・新聞において発表された幾多のエッセイから成り、そのテーマもきわめて広範囲な学問分野、いやそもそも既存の学問分野には容易に組み入れることのできない問題領域に及んでいるという外的事情のみならず、いわゆる「非体系性」、「耽美主義」、「相対主義」——ちなみに、私は必ずしもこれを否定的には評価しない——といった彼の思想のもつ性格そのものが、その全体像を的確に把握し描出することを困難にしている理由であることも、確かなところであろう。しかしながら、こうした困難を生みだす最大の要因は、彼の思想を解釈するわれわれ自身が《引き裂く社会》に生きる《引き裂かれた人間》であり、彼の思想的営為の主題が《引き裂かれた人間、引き裂く社会》(J.H. ヴァン・デン・ベルク)にかかわる問題群であった、という事情に求められるべきであろう。ありうべき誤解を承知のうえであえて極めつけたものいいをすれば、《引き裂かれた人間、引き裂く社会》の問題性を根源的に透視しようとする思想を、《引き裂かれた人間、引き裂く社会》の価値や論理に浸潤された地平からのみ理解しようとするとき、そうした思想の統一的把握への径路が閉ざされるのは、必定ではなからうか。もっとも、そういう本稿も、こうした地平を一步たりとも越えいではいけない。
- (3) Vgl. etwa R<sub>1</sub>184ff.
- (4) 拙稿「ジンメル『流行論』への試論」『ソシオロジ』第31巻第3号、1987年、19頁以下、参照。
- (5) Vgl. etwa S<sub>2</sub>296; Die Mode, in: *Philosophische Kultur*, Leipzig 1919, S<sub>2</sub>245.
- (6) Sieh K.Ch.Köhnke, Von der Völkerpsychologie zur Soziologie.

- Unbekannte Texte des jungen Georg Simmel, in: *Georg Simmel und die Moderne*(hg.v.H.-J. Dahme/O.Rammstedt),Frankfurt a.M. 1984, S.402.
- (7) Vgl. *G*,40u.60; *H*,60f.,64u.68f.
- (8) われわれがいうところの「他者認識」と「直覚知」の区別と直接、重なり合うわけではないが、ジンメル自身も Erkennen と Kennen ないし Wissen を用語上も区別している箇所がある。Vgl. *S*,485; *R*,84ff.; Über Freiheit. Aus dem Nachlaß von Georg Simmel, in: *Logos 11,1922/23*.
- (9) Über die Liebe, in: *Fragmente und Aufsätze, München 1923,S.61*.
- (10) *Der Konflikt der modernen Kultur*, München/Leipzig 1918<sup>1</sup>, 1921<sup>2</sup>, S.7.
- (11) *Buch des Dankes an Georg Simmel* (hg.v.K.Gassen/M.Landmann), Berlin 1958, S.9.
- (12) *Rembrandt als Erzieher* (1890),zitiert nach: K.Lichtblau, Das Pathos der Distanz. Präliminarien zur Nietzsche-Rezeption bei Georg Simmel, in: *Georg Simmel und die Moderne*, a.a.O.,S.241.
- (13) 拙稿「ジンメルの個人概念に関する一考察」『一橋論叢』第95巻第3号, 1986年, 同「G・ジンメルの『貨幣の哲学』における『主体と客体との距離』の問題」『社会思想史研究』第11号, 1987年, 同「G・ジンメルにおける個人主義思想の諸形態をめぐって」『一橋論叢』第100巻第1号, 1988年, 参照。
- (14) Sieh auch: Philosophie der Landschaft(1913),in: *Brücke und Tür*, Stuttgart 1957.

(著者の住所 〒186 国立市東2-4 院生寮 12号室)